水郷の假館(カリ)に宿し給つりこれ夜風雨更にはげしく米津村の方より一陣の光耀飛来り震雷れごとく爛然として地上に墮ちるのあり侍臣ら就ておきを見れば一規の鑑ありこれ仮えて背をみるに銘あり曰南無天満自在天神の九字を鑄付さり侍臣ら匆々として敬拜をおもふに應る是菅神の顯聖なるべし因て故老に叩くに曰むかし米津村に天満宮ありこれを毀つ事既に久し今ほのさりてかゝることあるは蓋し神慮形らんをはて米津の東北ハ筑前太宰府なれば菅神廟の什物この地れ舊墟よくだりけるにや豈其奇なる哉　公其鑑を拜収して竟に家鎮の

至寶とかしこまい米津村一再ゝ菅神廟に齋い給つり事は尚つゞらる　臣山本正誼に記を　命して石に勒さしむ

米津菅神廟記

天明丁未之秋　前太守中將公如東都九月三日病於出水郷是夜風雨晦冥郷吏數人踵門而告焉曰臣等今夕于振本郷至米津村忽一道光輝從東北數十里外飛來到村而落於地爛々如岩下電者就而視之獲一鑑焉背有銘曰南無天満大自在天神於是人々竦然起敬以為天満天神之顯聖也因考圖記米津村舊有天満宮毀廢既久云而今也顯聖乃有如此且米津之東北正値筑前州太宰府而神鑑飛來自夫東北

豈宰府天神降於此者耶伏乞重建祠宇於斯以祭祀之許之越明年戊申正月鳩工而成於十一月號曰米津天神而神像實以宰府飛梅樹枝為之又鑄一鑑周圍形製悉倣飛來之鑑懸諸神坐以像其德而飛來鑑寘於　公宮以為鎮家之寶因命歩卒將行府學教授事臣山本正誼為文記之竊謂天滿天神之為德赫々在上明々在下所謂參天地關盛衰浩然而獨存者也則其靈異之迹或見於此亦理之常無足怪者然忽然飛來格於斯也適屬五馬一病之夕豈我　公明德馨香之所致者非耶主而祭之於此庶其有以鎮我邊邑利我民人云爾於是乎書

時天明八年季冬之月也

歩卒將行府學教授事山本正誼謹記

隱館の地をトし給ふ　第十一條

荏原郡荒蘭崎北高縄手の崗上ハ　公の別墅あり延褒五百餘歩東ハ海戸に臨ミ西は高燥ふして喬木森々たり南は數畦の水田北ハ林薄ふして樹竹雜植を中央ハ崗上にして平夷なり此地穢墟とふること既に久し寛政四年壬子のとし此地をトしたまひ榛莽を芟砂石をくゞし隱館を興葺を同年三月十一日遷らせらるゝ於是よりして園中

に稲荷社天女宮觀音堂關帝廟を齋ひ其側に蒲萄架をつくり弄玉の亭を擬造し其東北に花欄を耕し大石盤の度景を安し（弄玉亭度景ハ共ゆ蕃國ゆ製を摹す）其下は海岸あり いまし つふ高縄手ハ蓋しゆの崖上ならんまた邸園中に新に地名を置たもふ園の總稱を蓬山と名づけ中央ゆ高阜を龜崗と名づけ邸中に稲荷坂鶴ゆ口たり環江等の稱を置き忽ち舊觀を改む

臣槃按ずるゆ關帝を神と稱して祭ふは宋の崇寧年まもしまきり此時帝の靈ゆらハれく蚩尤神を破りたり故に天子より封して崇寧靈君と稱ゆ帝と號するは明の萬曆四十三年十月十一日ゆ又勅して三界伏魔大帝と封しけるまた天尊關聖帝君と稱せしハ明の天啟四年七月まはじまゆ大帝の祭祀ゆも帝と稱せらるに定りたるを帝の廟ハ諸方にゆり其多き中に北京正陽門外の廟ことに莊嚴ゆりとぞ詳ゆ清の劉侗ゆ帝京景物略ゆ見えたりまた釋氏伽藍神と稱せしは隋の開皇十二年天台智者大師當陽ゆ玉泉寺を建し時ゆ帝の靈ゆらハれく佛法護持を約せしよりく帝の塑像を玉泉寺に安して伽藍神と稱せしとぞ事は明ゆ王世懋の宛委餘篇にゆえたり中山首里ゆ帝の廟を建しは清の

康熙年に程順則唐山より帰国し時に事ありといつり
藩府ふく帝を齋ゝ〜ハ蓋〜中山より傳〜なるべ
〜漢壽亭侯印辨は朱晨の墨池編ゆ詳ふり仰望前集に采抄〜たり
再韓種人參圃なつくる　第十二條

參圃舊吉野郷藥園中にあり地に應ぜば寛政四年
官園の參子を乞ひ給ひ　臣槃　を〜て地なる相せ〜め隅日諸
山孔うち二十餘所を相〜て圃をつくる歳ことゝ蕃茂せ
三四歳なつて
官製に形らひ蒸製を此法は清の三朝實録ゆみえるり夏
を渉りて蠹損せば今國用餘ゆり以往　公族にいさるま
で朝鮮産なる用ゆ形ことを禁ぜおき一益ゆり
臣槃　按ずるに朝鮮産も巧偽日々ゆおほく真物ハ十の
一二ふ〜てみ形事稀ふり

成形實録改撰　第十三條

是より先二十餘年前ゆ成形實録編集の舉ゆりこと〜寛
政五年癸丑　臣曾槃臣白尾國柱等なる〜て改正せ〜む其分
部は農事五穀菜蔬藥草樹竹蟲豸魚介禽獸都く十部一百
卷ふりおと〜其目を改めて成形圖説と形〜たもふ　公
の尊慮ハ印本とな〜封内〜分布〜て農事なる勸め品物を
辨ま〜藥品功用をさら〜め其中民の利益を志ふを要と

ふさしむこれまさ民ハ悶ハ一端ひとを民ハ悶むのミに
らを固本ハ一策ハり此書四十卷鏤版ををしに文化三年
丙寅のとし三月四日高縄手の海濱より祝融ハ災れこと
て芝邸延燒を是ふ於て姑く編集局を収め屬吏數人帰
國を　命ぜ但臣槃一人ハして後篇を編集せしむ何ぞ圖
む文政己丑の災る印版十卷火に亡びたり底稿もまさを
かり同年再び臣槃に其撰集ハ　命しまふ臣槃年已ふ
七十有三ハきバ其卒業ハ期測りをふべからぶ吁慨をべ
きのみ

種藥の園をトしに王ふ　第十四條

享和元年寛政十三年二月二十日改元辛酉二月　公臣槃ふ　命して荏
原郡大崎村の別墅ふ種藥ハ園ハつくらしめ秋九月藥草
木ハ移植を數百品全く集りて山上ハ松林中ハ
炎帝廟ハ創建せしめまた臣槃ふ　命して其碑文を製さ
しめ石に勒して立しむ其文左ハごとし

炎帝廟碑并頌

臣曾槃拜譔并建

太公別墅在荏原郡大崎村延褒四百餘畝棘榛蔟生樹竹雜
植為穢墟者有年矣享和元年春二月　太公　命臣槃刈其
莽蕪降其沙石以為種藥之園臣槃既受　命躬督課役丁凡
四方難得之種海外舶載之物旁募咸致好陽之木好陰之草

宜原宜隰擧辨其性各栽其地畦以別之欄以隔之自下種分根杆條接枝臣槃皆任其拮据爲臣槃切劑本草多年目睹而貯之胸口授而傳之紙者一旦悉皆爲此園中物矣　太公素好醫藥之事此擧雖出於清閑遊戲之餘好生之德臣下孰復不奉戴其思惠醫學後進得籍以辨別藥物其裨於驅使之用亦無窮矣士太夫更番秪役都邸者被其恩澤免夭昏札瘥之患亦無窮矣　太公曰乃言則然矣雖然此

炎帝氏之德也寡人何敢當吾營栽逍遙之地而已遂　命建炎帝之廟又　命臣槃書其事勒石於廟旁頌曰有寒有溫藥殊其性惟臣惟君善治厥病萬世維新

炎帝之靈惠茲生民永遠遺經廟成翼然孰不敬肅

炎帝之恩海外維詠

維時

享和元年辛酉秋九月也

搏埴第十五條

朝鮮歸順の人に金海てうものゝ裔孫星山仲兵衛といふもの有り搏埴の良工なり享和二年彼地東西諸州を經歷せしめ其良工を訪い家々の法樣及學ばしめ年を〻て藩府に歸り新に大窯をきづき諸州の法樣を摹擬せしこれより陶器の製くハ〻

臣槃謹て按るに慶長四年　義弘公朝鮮より歸陣したまふとき其土民二十一姓を俘て率さり其姓は安鄭朴李羅燕姜金卞黄張林車朱盧何陳白沉丁崔是凡り其中二姓は琉球へ遷せまゝ二姓はいやく亡びたり慶長の比八男女八十餘人はゞめは封内に散在せゝかど寛文九年に薩摩日置郷苗代川へ一藪とふゝ僉搏埴もて世營とせりまた謹て按るに　義弘公朝鮮の埴をもて大隅國帖佐の郷に陶匠を置き渠に　命して茶鍾を搏ゝむ其底に印記る韓字三等萬曆字號一等のり後に悉くかき改毀ゝむ稀る世に存したを古帖佐と稱して末茶家これを賞玩せりさゝ歸順の民今るいさりて舊俗を改めゞ慶賀の礼を設る時は長袖短衣單裙を著け網巾をまとい紗笠を戴く其起居蓋ゝ舊習なゆゞ此等をして韓語の譯士たらゝち彼地より漂到せゝとの比通辨の便りとゞ尋ては韓語及い韓學をまふばゝむ其戸口今るしていは四百餘宇男女一千四百餘人近来また分處して大隅國大隅郡鹿屋今鹿野屋ふつくふ郷に遷せり其戸口八十餘宇男女四百餘人　先公けゞゝ芳志を異域に照せものふらん乎まゝ嘗て舊史を見るる　香椎石清水両廟に時より韓人朝貢せり猶且　欽明紀に二

十五年三島埴盧同二十六年高麗人頭霧唎耶陛等投化於筑紫置山背國今畝原奈良山村高麗人之先祖也また元正紀ハ靈龜二年高麗一千七百九十人遷武藏國こゝ高麗郡高麗ハ蓋〳〵其故址なるべし此の他ゝ事ハ征韓錄ハ云えたり

獨樂園 第十六條

蓬山園中の西ハ平東の地にあり四季ゝ秀謝晨夕の晴陰煙霞の隱顯其景趣更ハ奇なり其地はあざたの枉真木ゝ簷をもふけ新室なつくらせ給ふたの一叢なを獨樂園と稱し花木千株を植四季の花藹殊は香ぐはし臣槃に おほせて四季花木記なつくらしむ言ちげなればこゝは省きぬ此擧ハけだし唐の李德裕ハ平泉ゝ記を擬せしめたもふなるべし此園ハ春晨秋暮 公の逍遥ゝ處となし給ひけることゝ享和二年うらゝかなる春日に 内班ゝ臣庶を召つどひ心のまゝに酒 賜ハんとて小鳩の上琪樹ゝ蔭花欄の傍清池ゝかとり敷どゝ五彩龍鬚むしろなを敷ハ山ゝ美海の鮮をつらね酒 賜ひけきバそこかしこうちむきて盃をめぐらし或ハ琴棋書画詩歌おのゞさまゞ其得たるを憚りなく清曠ゝ樂なをさしむ 公は時をゝくるま小鳩の上なる胡床にまして某々らゞたける技を

めでさせ春宵をひたり給ふ

靈芝を採 第十七條

享和三年癸亥八月九日の夜 臣槃 召に應じて侍坐せ 公の おなせふ今日或矣より靈芝を乞はれける靈芝近山ふありや 臣槃 謹て白嘗てきゝに武藏秩父郡山中槲櫟枯木よりまれに秋月其菌花を發せと兼るのうけきい明朝はやく立て採り來ふべしとれ 仰かうけ奉至その夜家ふかゝりて旅よちひをとゝの〻星をいさでたいでぬ朝まゞきは四谷新宿れはゞて鳴戸てふ所にいたきバ板戸のけゝ柴たく煙りたつ水驛あり志バしゝに息ふよ

にきふつゞれ新鮮の靈芝一籃を荷いたふ村童もゝにいこふりれ心は喜い渠は問ふちの蕈ハ售げるふや答ていふげふも市人はむさく形りと頓はちのいと籠を購ひえゝ途をいちぎ直に高縄手の 公館にまかん出て 呈 賢 公喜色ありていのでかくはやく採来るぞとの玉ひけ於謹て購いえたるまゝ於陳言を即ふ矣ふ寄贈せらふ矣れ御かゝり言にきのふ乞いけるに今朝疾も賜るは實は 公は仙家ふりけゞーハ臣庶れ中に空を翔る仙術の士ある〻〻仙家異術莫人知とハこき於いふふるべ〻と感嘆あ也〻と 仰られき 臣槃 ハ陰ふおもふにかの

村童こゝ仙兒おらん

或人云本草綱目靈芝二字無所見敢問其出所乃答云班固靈芝歌因露寢兮產靈芝象三德兮應瑞圖會要肅宗上元三年延英殿御座架上生玉芝一莖三花親製玉靈芝詩玉殿肅々靈芝煌々孟浩然詩焚香病華頂裛露採靈芝穆皎然詩春遊亂踏五靈芝初學記東漢有靈芝池王海後魏有靈芝臺以上見佩文齋韻府支韻按靈芝多發於槲櫟枯木又有生於土者有生於石者其狀一般故皆稱靈芝也本草綱目石耳一名靈芝引靈苑方又按耳橋也狀似蛾故亦曰蛾芝則丁蕈之稱是一類二種必非一物矣時珍未深考耳癸亥秋曾槃識

龜崗十勝の詩 第十八條

文化元年享和四年二月甲子春醫官桂川氏於介と〻列侯に十景の詩を乞い給ふ鋟刻立石の事を臣槃に任じたるふ即貞石を擇ミ良工をして刻せしむ篆額八八分なり四廓の花紋八韓昌黎の碑樣を倣て臣槃おきを製て龜崗の南側に立數十張揭〻てこれを諸侯及び公子に寄贈せしむ

蓬山老松　源治寶　黄門紀伊公

朱門別業鎖長松山似蓬萊第一峯日暖溪邊馴白鶴雲深林下蟄蒼龍流膏耐助仙家壽避雨還輕秦代封偃蓋況含滄海